

平成22年6月5日現在

研究種目： 基盤研究（A）  
 研究期間： 2006 ～2009  
 課題番号： 18202019  
 研究課題名（和文） 日本・朝鮮間の相互認識に関する歴史的研究  
 研究課題名（英文） A Historical Study on the Mutual Perception between Japan and Korea  
 研究代表者  
 吉田 裕 (YOSHIDA YUTAKA)  
 一橋大学・大学院社会学研究科・教授  
 研究者番号： 20166979

## 研究成果の概要（和文）：

本研究では、日本の側の対朝鮮認識がどのようにして歴史的に形成されたのかという問題を、朝鮮の側の対日本認識の形成と関連させながら、検討してきた。とりわけ、この課題を達成するために、韓国のソウル大学を中心にした歴史研究者とシンポジウムを行うとともに、日朝関係にかかわる遺跡（戦争遺跡等）を合同で踏査し、討議した。

## 研究成果の概要（英文）：

This project examined how the perception of Korea in Japan was historically formed while comparing it with the perception of Japan in Korea.  
 In order to achieve this goal, a joint symposium and an investigation composed of Japanese and Korean historians were conducted.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	7,700,000	2,310,000	10,010,000
2007年度	6,500,000	1,950,000	8,450,000
2008年度	6,400,000	1,920,000	8,320,000
2009年度	6,100,000	1,830,000	7,930,000
年度			
総計	26,700,000	8,010,000	34,710,000

研究分野：日本史・日本近現代史・政治史

科研費の分科・細目： 史学・日本史

キーワード：日本史、朝鮮史、歴史認識、日朝関係、歴史共同研究、国際情報交換

## 1. 研究開始当初の背景

（1）近年、「歴史認識」の問題が、東アジアにおける国際関係を不安定化させる重要な要因として、大きな注目を集めるようになってきている。この問題は、各々の国民国家がその国民的統合の基盤としている「記憶の共同体」相互の相克や摩擦という側面を有するだ

けに、問題の処理を誤るならば、深刻な政治問題に発展する可能性を常にはらんでいる。「記憶の共同体」同士の衝突が互いのナショナリズムを刺激し、相互の応酬を通じてナショナリズムのスパイラル現象が生ずる可能性が否定できないからである。こうした状況の中にあって、歴史学に求められている

のは、この「記憶の共同体」をいかに歴史的に相対化するか、という学問的試みである。すなわち、様々な記憶相互間のせめぎあいと国家や社会諸集団による関与の過程をへて、「記憶の共同体」がいかに形成されるのかを、具体的に明らかにすることである。その際、重視したいのは、他者認識の問題である。日本の場合「記憶の共同体」の核をなすのは、同じ歴史、文化、伝統を共有するとされる「日本人」としての同朋意識だが、この日本人としてのアイデンティティは、他者認識と密接不可分の関係にある。こうした研究状況を鑑み、東アジア世界の中の日朝関係に焦点を合わせながら、日本の側の対朝鮮認識がどのようにして歴史的に形成されたのかという問題を朝鮮の側の対日本認識の形成と関連させながら、歴史具体的に明らかにする研究を始めることにした。

(2) 日本人の自己認識や対アジア意識に関しては、荒野泰典ほか編『アジアのなかの日本史 I アジアと日本』(東京大学出版会、1992年)、『アジアのなかの日本史 V 自意識と相互理解』(同上、1993年)、溝口雄三ほか編『アジアから考える [1] 交錯するアジア』(東京大学出版会、1993年)などの貴重な研究成果が現われ始めている。しかし、日韓両国間の相互認識に焦点を合わせた国際的な共同研究は行われていない。また、歴史における記憶の問題を、前近代と近代との関連を重視しながら本格的に分析しようとする研究はまだ登場していない。これまでの研究では、前近代の対アジア認識と近代の対アジア認識とが別個に問題とされ、両者の関連が問われることはあまりなかった。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、東アジア世界の中の日朝関係に焦点を合わせながら、日本の側の対朝鮮認識がどのようにして歴史的に形成されたのかという問題を、朝鮮の側の対日本認識の形成と関連させながら、歴史具体的に明らかにすることにある。

(2) 本研究の特色をいくつか挙げれば、第一に、本研究では、近代以降の相互認識の形成に先立つ前史を重視した。近代国民国家の形成に伴って「記憶の共同体」が新たに形成されるといっても、それは近代以前に形成された歴史の記憶や他者イメージをあくまで基盤としてでのことである。このような歴史のいわば古層を明らかにするため、前近代の歴史を重視し、次の二つの研究テーマを設定した。一つは、日朝貿易・日朝外交を通じて、どのような相互認識が形成されたのかを説明することである。具体的には、日本側の窓口となった対馬の宗家文書と朝鮮側の窓口だった釜山の朝鮮側の対日外交史料の分析が中心となる。もう一つは、現在でも歴史教

科書問題の重要な争点となっている豊臣秀吉の朝鮮出兵(壬辰倭乱)である。この大乱の歴史的記憶がどのような形で形成されたのかという問題を、日本側では、軍記物や講談など、朝鮮側では、「壬辰録」などの「野史」、さらには両国の民間伝承の分析を通じて明らかにする。

(3) 第二に、植民地宗主国であった日本の側の対朝鮮認識にはらまれる独特のゆがみを明らかにすることである。この問題では、次の二つの研究テーマを設定した。一つは、朝鮮王朝期の朝鮮経済のイメージである。朝鮮王朝では、貨幣や市場を媒介としない現物貢納制的財政制度が一貫して採用されたため、貨幣の役割は副次的なものとなった。このため、植民地時代には、前近代の朝鮮社会は貨幣流通の未発達な社会というイメージが生まれ、そのことが朝鮮社会を停滞的な社会とみなす歴史認識の根拠ともなった。日韓両国における最新の研究成果に学びつつ、そうした歴史認識を相対化すると同時に、独特の朝鮮王朝論が形成された歴史的経緯や歴史的背景についても分析を行なう。もう一つの研究テーマは、植民地期に日本側が、朝鮮における血縁集団や親族制度の問題をどのように認識していたのかという問題である。皇民化政策の一環として行なわれた創氏改名が朝鮮側の激しい反発をよびおこした一つの背景には、この問題についての日本側の無理解があった。氏族や家のあり方に関する比較研究を行ないつつ、朝鮮の歴史や社会についての認識を深めることができなかった、当時の日本側の歴史研究のあり方にも再検討を行なう。

(3) 第三に、国民国家の基盤となる「記憶の共同体」が絶えず再編成されることに注目した点も本研究の独自の視点である。特に、日韓両国の場合には、日本による植民地統治の時代をどのようにとらえ、どのように総括するかが、第二次大戦後における両国の「記憶の共同体」の中で、重要な争点となった。日本側において、この問題をめぐって鋭い分岐が生ずるのは言うまでもないが、韓国側においても、民族主義的な立場からの「日帝」批判論を相対化しようとする動きが、学界にも抬頭しつつあるのが現状である。日韓両国間、さらには両国の内部における記憶の相克と摩擦の歴史過程を、政府の対外政策、歴史教科書の叙述、世論調査にみる国民意識、学界の動向、大衆文化の現状、などに着目しながら分析する。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究では、研究課題を遂行するために、A班からE班までの5つの研究項目班を設定し、それぞれの班で共同研究を推進する。A班：日朝外交・日朝貿易をめぐる相互認識

B班：豊臣秀吉の朝鮮侵略（壬辰・丁酉の倭乱）をめぐる歴史的記憶

C班：中世・近世における日朝両国の経済構造をめぐる相互認識

D班：親族制度と社会構造をめぐる相互認識

E班：日本の朝鮮植民地支配期における「知」のあり方

（2）それぞれの班の共同研究及び班員の研究の成果を持ち寄り、日韓相互認識研究会を年に数回開催する。

（3）ソウル大学を中心とする韓国側の研究者と連携して、日韓歴史共同研究シンポジウムを年に一回開催する。開催に当たっては、韓国側の研究者と協議の上、毎年いくつかの論点を選定して、それぞれから報告者を出し、討論を行う。シンポジウムの成果をまとめた研究報告書を作成する。

#### 4. 研究成果

（1）A班～E班において、それぞれ資料調査・収集を行い、それぞれの研究課題を深め、班の研究成果を持ち寄るとともに、韓国から歴史認識に関わる調査・研究を行っている研究者を招いて、日韓相互認識研究会を15回開催した。

第一回日韓相互認識研 二〇〇六年七月九日  
於一橋大学職員集会所

山口公一「植民地朝鮮における「国家祭祀」の整備過程—「武断政治」期（一九一〇—一九一九）を中心に—」

第二回日韓相互認識研 二〇〇六年七月三日  
於一橋大学職員集会所

一瀬千恵子（東北大学大学院、研究協力者）  
「『朝鮮軍記』研究の現状と課題」

第三回日韓相互認識研 二〇〇六年九月八日  
於一橋大学職員集会所

野木香里（一橋大学大学院、研究協力者）  
「朝鮮民事令中「親族」規定に関する一考察—一九一〇～一九二三年を中心に—」

蓑輪明子（一橋大学大学院、研究協力者）  
「日本における一九二〇年代の家族制度改革論—臨時法制審議会を素材に—」

第四回日韓相互認識研 二〇〇六年一二月三日  
於一橋大学職員集会所

山口公一「植民地朝鮮における「国家祭祀」の整備過程」

第五回日韓相互認識研 二〇〇六年一二月二〇日  
於一橋大学歴史共同研究室会議室

渡辺治「グローバル大国化と憲法改正—戦後小国主義の打破をめぐる—」

第六回日韓相互認識研 二〇〇七年七月一日  
於一橋大学マーキュリータワー

矢島 桂（一橋大学大学院、研究協力者）  
「植民地期朝鮮における「国有鉄道十二箇年計画」」

第七回日韓相互認識研 二〇〇七年九月一日  
於一橋大学マーキュリータワー

小川和也「近世日本における『牧民忠告』の受容—朝鮮・密陽版の影響を探る—」

三ツ井崇「ハンゲル運動と植民地支配—その実態分析と研究史批判—」

第八回日韓相互認識研 二〇〇七年一〇月二八日  
於一橋大学マーキュリータワー

田崎宣義「学園都市開発と国立」

第九回日韓相互認識研 二〇〇七年十一月二三日  
於一橋大学マーキュリータワー

山内民博「降倭と向化—1609年蔚山府戸籍大帳の分析から—」

第一〇回日韓相互認識研 二〇〇八年八月一日  
於一橋大学マーキュリータワー

木村元「日本の戦後教育学の展開と課題—教育史研究に注目して—」

木村直也「幕末維新期の対馬と日朝関係」

第一一回日韓相互認識研（一橋大学・吹野プロジェクトとの共催）二〇〇九年一月一日  
於一橋大学マーキュリータワー

南相九（東北アジア歴史財団・研究員、ゲストスピーカー）

「韓国政府傘下の「過去事」関連委員会の現況と歴史認識」

第一二回日韓相互認識研 二〇〇八年八月一日  
於一橋大学マーキュリータワー

森 武麿「日本海湖水化計画と朝鮮植民」

酒井裕美「開港期朝鮮の関税「自主」をめぐる一考察」

第一三回日韓相互認識研（一橋大学・吹野プロジェクトとの共催）二〇〇九年九月二六日  
於一橋大学マーキュリータワー

徐 民教（韓国・親日反民族行為真相究明委員会専門委員、ゲストスピーカー）  
「朝鮮出身の日本軍将校」

第一四回日韓相互認識研（一橋大学東アジア政策研究プロジェクトとの共催）二〇一〇年一月一日  
於一橋大学マーキュリー

金 廣烈（韓国：光云大学校東北亜大学教授・学長、ゲストスピーカー）  
「戦時中日本陸軍の朝鮮人農耕隊」

第一五回日韓相互認識研（一橋大学東アジア政策研究プロジェクトとの共催）二〇一〇年二月一日  
於一橋大学マーキュリータワー

尹 明淑（韓国・親日反民族行為真相究明委員会専門委員、ゲストスピーカー）  
「韓国における過去事整理の成果と課題—独立運動、抗日、親日をめぐる歴史認識を中心に—」

（2）研究成果を発表する媒体として、雑誌『日韓相互認識』を創刊して、各地の研究機関に配布するとともに、一橋大学機関リポジトリに登録して、インターネットで閲覧できるようにした。本研究の期間で、創刊号と第2号を刊行し、第3号を編集した。

（3）日本側の共同研究の総括と、韓国の歴史研究者との研究交流のため、第9回～第1

2回日韓歴史共同研究シンポジウムを開催した。

第九回日韓歴史共同研究シンポジウム日程  
二〇〇七年一月二日（金）～一四日（日）  
日韓共同学術大会 於一橋大学佐野書院  
報告者及び報告タイトル

李賢恵「古代韓中日間の青銅器原料交易」  
山口公一「植民地朝鮮における「国家祭祀」  
整備過程―「武断政治」期（一九一〇―一九一九）を中心に」

都珍淳「世紀の忘却を越えて：日露戦争100周年記念行事と記念物を中心に」

渡辺治「グローバル大国化と憲法改正―戦後小国主義の打破をめぐる―」

日韓合同巡見：しょうけい館・昭和館等、九段周辺の戦争関連史料の閲覧及び遺跡の踏査  
第一〇回日韓歴史共同研究シンポジウム日程  
二〇〇七年二月二〇日（木）～二三日（日）  
於韓国全羅南道

日韓共同学術大会於忠武観光ホテル会議室  
山内民博「降倭と向化―1609年蔚山府戸籍大帳の分析から―」

李根寛「『韓清議約公牘』に関する予備的考察―国際法的観点から―」

三ツ井崇「植民地期朝鮮におけるハングル運動―研究の現状とその批判的検証―」

都珍淳「戦争の遺跡を平和の架橋へ―東北アジア海洋（岸）ピース・ベルト構築のための試論―」

日韓合同巡見：韓国南海岸国際戦遺跡地踏査（望山島、加徳島、新港湾弘報館、金水賢安骨音楽堂、安骨倭城、熊洞、薺浦、熊川邑城、鎮海市庁、海軍士官学校、海士博物館、鎮海市内遺跡、巨濟島、松真浦、巨濟市庁、閑山島制勝堂、海底トンネル、他）

第一回日韓歴史共同研究シンポジウム（対馬島シンポジウム）日程 二〇〇八年八月二二日～二五日 於 長崎県対馬市

日韓共同学術大会 於対馬市交流センター  
李泰鎮「歴史変動期における日本と朝鮮半島」

都珍淳「平和作りと戦争の正視―対馬島の戦争遺跡―」

木村元「日本の戦後教育学の展開と課題―教育史研究に注目して―」

木村直也「幕末維新期の対馬と日朝関係」日韓合同巡見：巖原市街、対馬島戦争関係遺跡

第一二回日韓歴史共同研究シンポジウム（韓国・済州島シンポジウム）日程 二〇〇九年八月二一日～二四日 於 韓国・済州島

日韓共同学術大会 於済州大学校西帰浦研修院会議室

金 浩「朝鮮朱子学者の理想と現実」

酒井裕美「開港期朝鮮の関税「自主」をめぐる―考察」

金興秀「韓日関係の近代的改編と宗氏渡韓論」

森武麿「日本海湖水化計画と朝鮮殖民」  
都珍淳「戦争と平和の反復と変奏―鹿児島と韓国の歴史記憶」

【コメンテーター】若尾政希・木村直也・吉田裕張 寅性、南 基鶴、朴 贊殖

（4）上記の日韓歴史共同研究シンポジウムの報告及び質疑を活字化して、報告書を作成し、各地の研究機関に配布した（第一回シンポジウム報告書まで）。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計51件）

①吉田 裕「なぜ、いま、『戦場』を問題にするのか」『歴史地理教育』748、査読有、2009、pp.10-17

②木村 元「人間形成の評定尺度と教育論争史研究―国民学校論の検討にむけて」『＜教育と社会＞研究』19、査読無、2009、pp.11-22

③若尾 政希「書物・出版と日本社会の変容」『歴史評論』710、査読無、2009、pp.54-61

④渡辺治「日本における新自由主義の展開と松下政経塾」『歴史評論』711、査読無、2009、pp.69-78

⑤糟谷 憲一「書評：呉映燮『高宗皇帝と韓末義兵』（ソウル・先人、2007年3月）」『朝鮮史研究会会報』175、査読無、2009、pp.38-42

⑥山内民博「朝鮮後期戸籍大帳僧戸秩及び新式戸籍僧籍の性格（下）」『資料学研究』査読有、2009、pp.34-57

⑦三ツ井 崇「言語問題」からみた朝鮮近代史―教育政策と言語運動の側面から―『中国21』31、査読無、2009、pp.285-306

⑧吉田 裕「兵士たちが語り始めたアジア・太平洋戦争の記憶」、NHK「戦争証言プロジェクト」『証言記録 兵士たちの戦争1』（日本放送出版協会）、査読無、2009、pp.8-17

⑨吉田 裕「現代日本人の戦争認識と日中戦争」『人民の歴史学』175、査読有、2008、pp.1-9

⑩森 武麿「ふたつの満州移民体験」『歴史科学』195、査読無、2008、pp.12-23

⑪吉田 裕「戦争史研究と医学・医療問題―軍事史と医学史の接点を探る―」『15年戦争と日本の医学医療研究会会誌』第8巻第1号、査読有、2007、pp.1-7

⑫月脚 達彦「東アジア人文韓国学の方法と模索―韓国史研究における近代」を中心に『韓国学研究』（仁荷大学校、仁川）17、査読無、2007、pp.23-39

- ⑬糟谷 憲一「日韓歴史共同研究を素材に歴史認識に関わる交流の課題を考える」『メトロポリタン史学』2、査読無、2006、pp. 79-91
- ⑭中村政則「終わった戦後と終わらない戦後」『歴史学研究』818、査読有、2006、pp. 38-42

〔学会発表〕(計15件)

- ①糟谷 憲一：書評報告：月脚達彦『朝鮮開化思想とナショナリズム—近代朝鮮の形成—』、朝鮮史研究会関東部会2009年11月例会、2009年11月21日、東京・専修大学神田校舎
- ②三ツ井 崇：「言語問題」からみた朝鮮近代史—教育政策と言語運動の側面から—(朝鮮語)、2009年仁荷大学校文科大学人文科学研究科招請学術セミナー、2009年10月29日、韓国・仁荷大学校
- ③酒井裕美：開港期朝鮮の関税「自主」をめぐり—考察、日韓歴史共同研究プロジェクト第12回シンポジウム、2009年8月22日、韓国・済州大学校西帰浦研修院
- ④酒井裕美：開港期における朝鮮外交の実態—朝英・朝独条約の再交渉とその均霑問題を中心に—、朝鮮史研究会関東部会4月例会、2009年4月18日、東京・専修大学
- ⑤三ツ井崇：三・一独立運動前後史にみる「民族」—教育・文化の側面から—、日本植民地教育史研究会第12回大会、2009年3月28日、龍谷大学
- ⑥森 武麿：日中民間外交と戦後責任、現代中国研究会、2008年12月24日、神戸中華会館
- ⑦森 武麿：戦時農村社会の比較的研究—日本の社会経済史から—、中国史研究会、2008年12月10日、慶応大学
- ⑧辻 弘範：在朝日本人の日常生活…上甲米太郎日記を読む、研究集会2008 植民地朝鮮で蒐集された『知』の歷程、2008年12月7日、九州大学韓国研究センター
- ⑨木村直也：東アジアの中の近世日朝関係史、九州国立博物館・朝鮮通信使400年記念国際シンポジウム「アジアのなかの日朝関係史」、2007年12月15日、九州国立博物館
- ⑩池 享：豊臣秀吉像の創出、2007年度韓日関係史学会国際学術大会「戦争の記憶の表象としての韓日関係」、2007年12月7日、ソウル歴史博物館
- ⑪木村元：三つの「戦後」と占領期教育改革の位置、教育史学会国際シンポジウム「占領期教育を問う—日本、韓国、ドイツ」、2007年9月23日、四国学院大学

〔図書〕(計4件)

- ①池 享『戦国大名と一揆』吉川弘文館、249頁、2009年
- ②吉田 裕『アジア・太平洋戦争』岩波書店、238頁、2007年
- ③加藤 哲郎『情報戦と現代史』花伝社、407頁、2007年
- ④アントン・レシェビッチ著、糟谷憲一・並木真人・月脚達彦・林雄介共訳『帝国のはざままで 朝鮮近代とナショナリズム』名古屋大学出版会、330頁、2006年

〔その他〕

ホームページ等  
「日韓相互認識」研究会  
コミュニティ・ホームページ  
<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/17439>

(参考)

本研究の成果を社会に問うため、雑誌『日韓相互認識』を発刊した。

第1号：2008年3月、第2号2009年3月

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

吉田 裕 (YOSHIDA YUTAKA)  
一橋大学・大学院社会学研究科・教授  
研究者番号：20166979

### (2) 研究分担者

糟谷 憲一 (KASUYA KEIICHI)  
一橋大学・大学院社会学研究科・教授  
研究者番号：80143345

池 享 (IKE SUSUMU)  
一橋大学・大学院経済学研究科・教授  
研究者番号：20134885

渡辺 治 (WATANABE OSAMU)  
一橋大学・大学院社会学研究科・教授  
研究者番号：70013026

木村 元 (KIMURA HAJIME)  
一橋大学・大学院社会学研究科・教授  
研究者番号：60225050

田崎 宣義 (TASAKI NOBUYOSHI)  
一橋大学・大学院社会学研究科・教授  
研究者番号：40107157

若尾 政希 (WAKAO MASAKI)  
一橋大学・大学院社会学研究科・教授  
研究者番号：80210855

加藤 哲郎 (KATO TETSUROU)  
一橋大学・大学院社会学研究科・教授  
研究者番号：30115547

小川 和也 (OGAWA KAZUNARI)  
一橋大学・大学院社会学研究科・特任講師  
研究者番号：90509035  
(H20→H21：研究分担者)

酒井 裕美 (SAKAI HIROMI)  
一橋大学・大学院社会学研究科・特任講師  
研究者番号：80547563  
(H21：研究分担者)

山内 民博 (YAMAICHI TAMIHIRO)  
新潟大学・人文社会教育科学系・准教授  
研究者番号：40263991  
三ツ井 崇 (MITSUI TAKASHI)  
同志社大学・言語文化教育センター・准教授

研究者番号：60425080  
辻 弘範 (TSUJI HIRONORI)  
北海学園大学・経済学部・専任講師  
研究者番号：20348493  
(H19→H21：研究分担者)

山口 公一 (YAMAGUCHI KOUICHI)  
追手門学院大学・経営学部・准教授  
研究者番号：20447585  
月脚 達彦 (TSUKIASHI TATSUHIKO)  
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授  
研究者番号：70272614  
(H20→H21：連携研究者)

木村 直也 (KIMURA NAOYA)  
産業能率大学・経営学部・教授  
研究者番号：50192018  
(H20→H21：連携研究者)

森 武麿 (MORI TAKEMARO)  
神奈川大学・法学部・教授  
研究者番号：20095756  
(H21：連携研究者)

林 雄介 (HAYASHI YUUSUKE)  
明星大学・日本文化学部・准教授  
研究者番号：00286246  
(H20→H21：連携研究者)

李 成市 (I SONSHI)  
早稲田大学・文学学術院・教授  
研究者番号：30242374  
(H20→H21：連携研究者)

中村 政則 (NAKAMURA MASANORI)  
一橋大学・名誉教授  
研究者番号：30017529  
(H20→H21：連携研究者)

並木 真人 (NAMIKI MASAHIRO)  
フェリス学院大学・国際交流学部・教授  
研究者番号：00208076  
(H20→H21：連携研究者)